

第2回運営推進委員会 議事録



■日時： 2012年12月8日（土）10時～17時
12月9日（日）10時～12時

■場所： 千歳科学技術大学 大会議室 他

■出席： 山梨大学 佐藤 眞久 (工学部基礎教育センター センター長)
吉川 雅修 (医学工学総合研究部コンピュータ理工学科 助教)
小俣 昌樹 (医学工学総合研究部コンピュータ理工学科 准教授)
成田 雅博 (教育人間科学部附属教育実践総合センター 准教授)
滝口 晴生 (教育人間科学部言語教育コース 教授)
日永 龍彦 (大学教育研究開発センター・副センター長)
奥原 利昌 (総合情報戦略部 情報支援室甲府支援グループ 係長)
愛媛大学 田中 寿郎 (教育・学生支援機構 共通教育センター センター長)
山崎 哲司 (教育・学生支援機構 教職総合センター センター長)
秋山 英治 (法文学部人文学科 准教授)
瀧本 笑子 (総合情報メディアセンター 事務課)
佐賀大学 穂屋下 茂 (全学教育機構 教授)
早瀬 博範 (文化教育学部 教授 兼 全学教育機構)
小田 正俊 (教務課・課長)
藤井 俊子 (全学教育機構 特任准教授)
古賀 崇朗 (教務課 教務補佐員)

| | | |
|----------|--------|--------------------------------------|
| 北星学園大学 | 中嶋 輝明 | (文学部 教授 総合情報センター長) |
| | 片岡 徹 | (文学部 専任講師) |
| | 松浦 年男 | (文学部 専任講師) |
| | 金子 大輔 | (経済学部 准教授) |
| | 野原 克仁 | (経済学部 専任講師) |
| | 高野 正明 | (情報システム課 課長) |
| 創価大学 | 秋谷 芳英 | (常任理事 大学事務局長 大学 CIO) |
| | 関田 一彦 | (教育学部 教授 CETL センター長) |
| | 望月 雅光 | (経営学部 教授 CETL 副センター長) |
| | 山下 由美子 | (学士課程教育機構 講師) |
| | 斉藤 幸一 | (教育・学習活動支援センター (CETL) 助教) |
| | 畑 由美子 | (教育・学習活動支援センター (CETL) 助教) |
| | 飛田 昌彦 | (大学事務局次長) |
| | 山岸 啓一 | (学士課程教育機構事務室 主任) |
| 愛知大学 | 早川 勇 | (地域政策学部 教授) |
| | 湯川 治敏 | (地域政策学部 准教授) |
| | 藤田 大介 | (豊橋教務課) |
| 桜の聖母短期大学 | 加藤 竜哉 | (進路部長 教授) |
| 千歳科学技術大学 | 川瀬 正明 | (学長) |
| | 小松川 浩 | (総合光科学部 教授 メディア教育センター長 キャリアセンター長) |
| | 山中 明生 | (総合光科学部 教授 大学教育センター長) |
| | 石田 雪也 | (総合光科学部 講師) |
| | 表 忠明 | (事務局次長) |
| | 大西 哲也 | (教育連携推進課長) |
| | 山川 広人 | (情報・メディア課 (技師)) |
| 日本工業大学 | 田中 佳子 | (学修支援センター准教授 (日本リメディアル教育学会)) |
| (株)リアセック | 近藤 賢 | (取締役COO) |
| | 笠井 恵美 | (本取組・事務局業務支援担当) (44名) |

■議事内容:

1. 事務局報告 (千歳科学技術大学 小松川 浩)



① HP の公開

<http://eight-univ.spub.chitose.ac.jp/>

事業の HP が完成したのでご覧いただきたい。公開用議事録もアップする予定である。

全体のトップページから、本事業に関する全てのコンテンツに行けるようになっている。

関連リンクとして、共通基盤教育システム（CIST-Solomon）、教材ショーケース（Moodle）、8大学専用会議室予約、8大学専用会議室（V-CUBE）もトップページに表示している。

② e-Learning Awards2012 での公開フォーラムの実施

11月30日（金）、東京・秋葉原にて、大学eラーニング協会等による公開フォーラム e-Learning Awards2012に参加し、本事業についての説明を行った。これは、広く社会に本事業を広報していく活動の一環である。当日は、80名の部屋に約90名の参加があり、50分間の説明を行った。

③ プログラムの愛称

取組を今後推進するにあたり、愛称を設けたいと考えている。事業に参加している8大学の頭文字を組み合わせたアナグラム案から、事務局としては事前に皆様に「SCHEASYS（シェアシス）」「SCHEASYSプログラム」「SCHEASYS-8プログラム」といった候補をお出しした。11月の時点で、2名の方から「SCHEASYS ∞ （シェアシス・エイト）」がいいのでは、という意見が寄せられた。8を横にしたような無限大の記号を追加する案である。この件についてご意見があればいただきたい。（特になし）。

④ 今年度予算の状況

大きな予算を抱えている大学は、2、3月に集中することをできるだけ避けていただきたい。予算が残った場合の影響も考え、計画の変更等があれば事務局に早めにお知らせいただきたい。共通経費でまかなうものは、現在、下記となっている。

- 1) 到達度テスト整備諸費用（クラウド上のシステムを動かす、webに問題を掲載する等）
- 2) 外部の力を借りる費用
- 3) 他大学（創価大学、千歳科学技術大学、佐賀大学）のポートフォリオ試行利用費用
- 4) 海外のルーブリック調査費
- 5) 学修観に関する業者テスト試行費、大学の卒業生調査費
- 6) 会議室（12月以降契約）システム使用費

⑤ eラーニング教材作成(予算及び著作権)に関する考え方

1) 予算について

先生方のご提案をもとに佐賀大学・創価大学・山梨大学にご協力いただき協議し、学生が主体的に学ぶ教材を整備していく来年度以降の予算案について、以下のように提案したい。

- ・eラーニング教材の作成に関しては、作成に協力を頂ける教員の所属する大学が配分額の中で原則積算する。費用としては、教員打ち合わせ旅費、外部協力者に関する監修費等のeラーニング教材開発に関わる費用が考えられる。
- ・なお、eラーニング教材開発においては、最終的に各大学の内製化を目指すため、外部委託は必要最小限とする。既に内製化が可能で余裕のある大学（教材開発の体制がある佐賀大学・千歳科学技術大学等）は他大学の教材整備に積極的に関与することとし（その際著作権は求めない）、それに掛かる費用（開発スタッフや学生アルバイト費用）は共通経費より捻出する。

2) 著作権について

1)の考え方にに基づき、作成された教材の著作権の管理は教材原案を考案する科目担当教員（著作人格権の保有者）が所属する大学にお願いする。8大学で著作権を持つのではなく、各大学で著作権も費

用もご対応いただく。

8大学連携としては、8大学所属の関係者への利用許諾を各大学にお願いしたい。ステークホルダーを通じて利用を希望する外部関係者への利用許諾は任意ではあるが、文科省として公開の趣旨が強いことをご理解いただき、利用許諾の調整、ご配慮をお願いしたい。

- 3) ステークホルダー等の外部協力者が主体となって作成する教材については、2) に該当しないため、予算管理及び著作権管理に関する調整は事務局で行う。
- 4) 到達度テスト・プレイスメントテストについては、8大学にて著作権を持つ方向を検討したい。これらのテストはWGの複数の大学の教員が分担して負担しており、全大学が管理を負うことが望ましいためである。このため作成に掛かる共通的な費用は共通経費で負担する。ただし、各大学の教員の旅費等については、すべての大学から人が出るという前提のため、各大学の分担金にて対応する。

⑥ 到達度テストに関する考え方

8大学連携が実施する到達度テストを、以下の考え方で進めていくことを本委員会にて確認したい。

基本的な考え方：

本プロジェクトは、さまざまな可能性を試行するものであり、その取組は各大学の事情に応じて実施するものである。

1) 入学後のプレイスメントテストは、8大学で共通に実施する。その際に得られるデータに基づき、データを生かして、学生の主体的な学びの促進やそのための初年次教育の改善・充実化の検証を実施することを、本プレイスメントテストの大前提とする。なお、各大学が個別の目的をもって既に実施している内容は妨げないようにする。学修観のテストについても同様の考え方を適用する。

2) 8大学連携・運営評議会では、1)の観点に立った際、大学としてどのレベルまで統計データを持つかを議論して頂く。プレイスメントテスト等に基づく共通データについては、大学間の序列に繋がらないようにデータ管理を行い、取扱いには十分注意する。

3) 本事業で実施する到達度テストは、1)記載のプレイスメントテスト実施後、学生自らが本事業提供の学修支援プログラム等を利用して主体的に学んだ成果を自ら振り返るために実施する場と位置付ける。こうした観点に立ち、今後の議論として、来年度に関しては、1)記載のプレイスメントテスト、その後の学修プログラム、到達度テストを一体的に検討していく必要がある。

以下に平成25年を想定した学修支援プログラム案を示す。皆さんのイメージをぜひお聞かせ願いたい。

- ・入学後のプレイスメントテストの後に、何らかの学習の動機付けを図り、学生への主体的な学びを促す。そして来年度後半に到達度テストを実施し、自らの学びを振り返らせる。合わせて、学修診断レポートを活用して、主体的な学びの重要性を気づかせる。こうした一連の学習プロセスの試行を来年度の目的とする（eラーニング教材があればそれも活用する。ただし、eラーニングは25年度から順次開発するので、これを前提にしない。基本的には、学習診断レポート（紙やeポートフォリオ）を活用して振り返りを促す）。

学習の定着には繰り返しが重要である。繰り返し繰り返し行っていく。学ぶツールは多様でよい。基本的には学生が自ら計画を立て自分なりに学習し、その成果を振り返らせるというプロセスがこの事業の目的だと思っている。

⑦ その他

(特に意見なし)



2. 各 WG(Working Group)からの報告

① 到達度 WG (山梨大学)

・前回、概略を話し合った。到達度の基準としては、数学は工学系数学統一試験、統計では統計検定、英語では TOEIC、日本語は論理的理解力、学修観は問診票形式にする等が基準として出された。引き続き、本日も検討予定である。スケジュールに関しては厳しい点もあるが、順次取り組んでいく予定である。

ほか、実施上の問題についてさまざまな問題が出された。詳細は前回報告した通りである。

② 共通基盤教育 WG (愛媛大学)

・前回、それぞれの到達度 WG で作成した問題を使って各大学で実施するという話をした。また、初年次関連の e ラーニングについてコンテンツの作成、コース化を考えている。詳しい科目内容は検討中なので別の機会にお話ししたい。



・また、愛媛大学では、四国の大学を中心に行っている FD/SD の講習・セミナーに参加している。FD/SD のプログラムは有料であるが、本事業と協定を結べば8大学の使用も可能である。そのような利用も今後考えられる。

③ 学習教材 WG (佐賀大学)



・ Moodle では、事務的共有サイト、教材のショーケース、教材開発ができるサイトに加え、さらに到達度テストのショーケースも作っている。しかし、ID とパスワードを配布しても、現時点ではほとんどアクセスされていない。これは e ラーニングに携わっていく事業上、大きな課題である。ご多忙と思うが、ぜひ入っていただきたい。皆さん宜しくお願い致します。

- ・ 現在、教材のショーケースには佐賀大学の英語（中学レベルと高校レベル）、千歳科学技術大学の数学（Moodle 形式）、山梨大学で開発しつつあるものが入っている。WG には、山梨大学のプレイズメントテストがアップしている。非常に便利であるので、ぜひ WG で使ってもらい、教材を掲示してもらいたい。他に、学習教材に関しては小松川先生が対応されているが、マクミランから教材を e ラーニング化してよろしいという話も出ており、それはぜひ進めていきたいと考えている。
- ・ 教材を開発する上では、電子書籍化も頭においていただけるとお願いしたい。出版される場合は、必ず電子化権利を持っていただいて、協議会に出していただけるとこの後スムーズに行く。今から我々としては、電子書籍の使い方を考えていかねばならない。

④ ポートフォリオ WG（創価大学）



- ・ 前回の勉強会の内容は文字起こしをし、成果物の 1 つとして後日アップする予定である。
- ・ 当初、専門家をお呼びしての勉強会も考えていたが、次回の委員会も時間が詰まっているようなので、その後のスケジュールを見ながら企画できればと考えている。
- ・ 今年度の目標は各大学の取組の共有であるので、千歳科学技術大学と佐賀

大学、創価大学の 3 大学の事例を、穂屋下先生のご協力をいただきながら、特徴的な画面のコピーを配布する等、見ていただける形の公開方法を工夫しながら共有していきたい。他に公開していただければ随時取り組みたい。

- ・ また、事務局には追加でポートフォリオのメーリングリストの作成をお願いしたい。

⑤ 特色ある教育 WG (北星学園大学)



・今年度は調査をもとに、各大学の取組を共有していく予定である。基本的には前回お示しした調査内容とそれほど変わっていない。本調査は、教室内の講義型授業から離れて、社会的な文脈の中で他者と交流しながら行われている体験的、実践的な活動で、「人間力」や「社会人基礎力」の向上による影響を及ぼすと考えられる活動全般(正課/正課外を区別しない)を対象とする。

- ・各大学で調べていただきたい項目としては、活動の目的・主旨・概要、正課/正課外の別、活動時期、取組年度、参加学生数の規模・学生の所属など、学内の実施体制、学外の協力者・関与者・役割・体制、活動に関する評価の有無やその方法、教育成果や意義、他大学の学生が参加できる余地・可能性、問題点といったことをご記入いただき、提出いただければと考えている。
- ・かなり大変な調査で、学内の方にお問い合わせすることも必要かもしれませんが、お忙しいとは思いますが、特にこの事業に関連すると思われるものを選んでご記入いただく形でお願いしたい。
- ・記入用エクセルシートをメーリングリストで配布し、次回の委員会までにご提出いただくのでよいか。提出方法は Moodle に変えさせていただくかもしれないが、提出後、最終の委員会で結果報告というスケジュールかと思う。何かご意見があればいただきたい。

⑥ 学修観 WG (桜の聖母短期大学)



・日本工業大学の田中先生の13項目81の質問を本日勉強し、その質問をどのタイミングで誰を対象に行っていくか、どのように8大学で行っていくかは、これからのテーマである。

・リアセックのPROGへの各大学の要望も今日明日で整理し、使用決定をしたい。

・今後、PROGのコンピテンシーとリテラシーという2つの項目と田中先生がお作りになられた項目との相関や、他のWGとのつながり、eラー

ニングや教材とのつながりもイメージしながら、本年度、実施の範囲、時期、田中先生の質問紙の実施の時期と範囲を決めてご案内できればと思っている。結果は、出た段階から整理しご案内できればと考えている。

⑦ シラバス WG(愛知大学)



・シラバス WG は、共通基盤 WG・到達度 WG と連携をし、作成する。

・前回以降、特に活動をしていないが、膨大なコンテンツの中から各学生がどのコンテンツを選んで学習していくかを、モデルシラバスとして提示できることが最終的な目標かと思っている。そのために、共通基盤・到達度 WG（各教科 WG）への依頼とキャリア系科目におけるシラバスにおける同様の検討が必要である。

・本日から行う共通基盤・到達度WGの各教科 WG への依頼としては下記の検討をお願いし、ベースとなるものを出していただく方向で、取組んでいただければと考えている。

1) 各教科での段階別（レベル別）シラバスの必要性の検討（学士力として目標とするレベルは？等）

2) 各教科における妥当な分野分けの必要性（プレースメントテスト・到達度テストとも分野別の成績を学生に伝え、その結果から自分が補う内容を学修していく。そのための妥当な分野分け）

3) 各教科、分野における目標レベル（必要があれば段階別）の設定
（具体的な数値目標があれば有難い。最終的にはルーブリックと対応する）

4) 段階別（レベル別）シラバス構成（ルーブリック検討）

5) シラバスに沿った e-learning 教材整備

- ・キャリア系科目におけるシラバスについても、SPI 対策、マナー講座、コミュニケーション能力等に関し、上記と同様の検討を行いたい。
- ・スケジュールとしては、プレースメントテストがある程度固まる頃（1月下旬？）に教科毎の分野とそのレベルについての検討結果を Moodle を使いながらまとめていきたい。可能であれば、3月の委員会で途中経過をご報告させていただきたい。

3. 科目別打合わせの報告（12月9日(日)）

① 日本語（愛知大学 湯川先生 ご報告） プレースメントテスト



●内容

- ・問題数は4分野、計100問とする。
- ・問題の内訳は、漢字分野が「読み・書き20問」「四字熟語5問」で計25問、語彙分野が「語義40問」「成句5問」「ことわざ5問」で計50問、文法分野が「受身」「使役」「可能」「敬語」を併せて計10問、短文読解分野が「文章題3題 1題につき5問」で計15問である。学力

と非常に相関が高い語義について、40問と重視する配分とした。

- ・レベルについては、各分野でレベル1からレベル10までを想定し設問を作成する。高卒レベルはレベル1～3とする。そのため、プレースメントテストはレベル3までの内容、主にレベル3を叩き台とし、多少それ以上のレベルも入れたテストを作成する。
- ・時間は45分程度。ウェブテスト形式による時間のかかり方の検討が必要であると考えている。

●今後の取組

- ・今後の具体的な作業としては、ベースがあるものは何回かすでに作ってきているので、早ければ今週・来週くらいに100問の問題を作りWGでチェックを行い、今年中には形にできる予定。

●教材

- ・プレースメントテスト後の日本語の教材については、愛知大学 中崎先生が作られたコンテンツを元に、それを利用できるように進めていく。
- ・プレースメントテストの結果が高卒レベル（レベル3）に十分達していなければ、入学後、レベル1・2の内容に対応した学習を進める。達していれば、レベル4以降を学習させていく。



② 英語（佐賀大学 藤井先生 ご報告）

●内容

- ・英語については各大学で既に使っているものがある。従って、WGでは入学直後に実施するものを想定し作成する。
- ・問題数は4分野、計60問を想定している。

- ・問題の内訳は、単語20問、イディオム15問、文法20問、内容理解5問くらいを想定。
- ・レベルについては、初級・中級の2レベルとし、4分野ごとにレベルのバランスをみながら出題。
- ・時間は30分。他に計りたいものがある場合は問題をプラスし45分版を作る。例えば、4分野からは除いているリスニングも計りたいのであれば、リスニングをつけた45分くらいのバージョンも用意したい。
- ・作成したテストを一斉に行うことになるか、あるいは、各大学で使いたいものを選ぶ、レベルごとに問題を変えたい等については、対応を検討していきたい。

●今後の取組

- ・山梨大学 滝口先生、愛知大学 早川先生、佐賀大学 穂屋下先生に初級から中級くらいのレベルを計れる問題を作ってください、それらを持ち寄ってアイデアを出していく予定。電子化されているものもかなりあるので、それを初級・中級の2レベル、4つの分野に分類し、そこからの出題も考える。
- ・問題は、レベルや作業等がわかるかたちで全てエクセルに入れる。今後 Moodle 以外に載せ替えることや、ペーパーでテストを行うことも想定し作成する。
- ・多くの大学で最後の習熟度としてみられる TOEIC との相関を見る必要があると計画している。
- ・電子書籍化も視野に入れている。具体的には、山梨大学でマクミランを使った電子書籍化の予定があるので、

その計画にのせていただき動きたい。

- ・現在、幾つかの大学でかなりの問題を持っているので、今回決まったレベルと分野にそれらを分けて、そこから自動的に機械的に問題を選ぶ方式をやってみたい。あるレベルと分野の枠から 20 問という時にはそこから自動的に機械的に問題を選んでもらう。その結果、問題が複数できるということを考えていただけるとよいと思う。また、機械的にピックアップする場合も、今後出てくる正答率の結果を組み込みながら出題していく方式を考えていただきたい。

③ 数学 (山梨大学 佐藤先生 ご報告)



●内容

- ・問題数は 35 問くらい。すでに中学から高校までの問題 69 問が出来ているのでそこから抽出する。
- ・問題は、文系・理系 1・理系 2 の 3 段階とする。文系の場合、大学で使うのは計算が主なので、図形はかなりはらずし連立方程式等を主に入れ、それに数学 I の範囲を加える。理系 1・2 の場合は、高校の範囲を全て含む。
- ・今回は CIST-Solomon のシステムを

使うため大学ごとで問題を選ぶことはできないが、来年度以降、Moodle に載せることになれば、たとえば、文系でも数学 II・III のある部分を使いたいといった要望について、69 問から自由に選択してもらって使ってもらおうということも考えられる。来年度以降は、項目選択方式を考えたい方がいいのではないかと考える。

- ・基本的な問題載せているため、易しすぎるといった場合は、項目を変えなくても問題自身を各大学が変えても構わない。評価をするときに、その項目が出来ているか出来ていないかで統計を取るわけだが、その大学のレベルで出来ているかどうかで評価をすれば、統計上の問題は無いと考える。
- ・問題を変える場合は、各大学で問題を打ち出して変える形になる。しかし、どのような形で各大学がテストを実施するか現在のところは分かっていない。
- ・プレイスメントテストでは、毎回同じ問題を出題し経年変化を見ましよう提案した。45 分で画面を見えなくする形を考えたが、問題が洩れないような実施形式をご相談し、全体として考えて行く必要がある(山梨大学では問題を回収し洩れないようにしている)。利用の仕方が各大学で違うので、全体として検討し、行ったほうがよいと考える。

●到達度テストについて

- ・統計学会でも学習進学テスト GP において教材と到達度テストを考えているようなので、独自に作るより、学会等と連携した方がよいと考える。この点については小松川先生に対処をお願いし、次回報告予定である。

④ 学修観 (桜の聖母短期大学 加藤先生 ご報告)



●内容

- ・まず、個票についての補足、共有になるが、学修観は他の教科とは異なりテストではない。日本工業大学 田中先生もご指摘されていらっしゃるが、学修観の問題は自分で自分をみつめるための材料である。小さいことのようにだが、これは思想的には大きい。このことを、私たち全員がしっかりと認識をしたほうがよい。
- ・田中先生の学修観に関する調査を、4月、各8大学で実施する。各大学での具体的な実施時期・規模は決定できなかったので、今後メーリングリストで検討する。個票の表現形式やアドバイスのメッセージは、今後、表現方法などを検討する。実施シートの配布・回収等の流れは事務局の収集方法も見ながらこれから決めていく。今後、愛媛大学 山崎先生が作られたサンプルを使って修正していくが、方法はウェブ、紙等、各大学で決めていくということになった。
- ・時間は30～40分くらい。田中先生の質問項目の表現はこのまま使っていく。
- ・PROGは申込大学の希望アカウント数が決まったので、1～2月末までに実施。PROGはコンピテンシーとリテラシーの両方の実施、あるいはコンピテンシーのみの実施が考えられるが、各大学で決める。学修観の考え方からするとまずはコンピテンシーであると考えられる。
- ・田中先生の学修観の質問と、PROGにおける社会から求められている能力を測る質問は異なるものだが、その両者の関係性は、データが出た段階、およびこれからの5年間でみていく予定である。
- ・次回の委員会では、創価大学で来年1月から実施するPROGの結果を開示できる範囲で共有する。愛媛大学では将来に向けた研修的な意味合いで今回は実施し、桜の聖母短期大学ではPROGの項目と各科目の関連性をみていく予定である。PROGの結果の読み方はリアセックからウェブ会議を通して共有してもらう。なお、PROGは、国立大学、短大等、属性別の統計情報があるので参照していくことは可能である。
- ・学修観の本質論は気づきを与えるということである。そもそも学生自身が自分で気づくということを支援できる教職員の指導、ケアのスキルが大事になるのではないか。学修観を考えていくと、教職員のスキル向上が最終目標になる可能性も出てきた。今後は、教職員教育を行うための学修観eラーニングも考えられる。

⑤ 情報（千歳科学技術大学 石田先生 ご報告）



●内容

- ・情報WGでは、教育システム情報学会で開発された、教科「情報」診断テストの80問をベースに使う。実際に北星学園大学では80問のうち30問を選び使っているの、今回はさらに10問追加し40問とし、情報の問題案が出来上がった。現在、別室で進んでいる情報WGでは40問の妥当性を検討中である。
- ・時間は30分。

- ・ 今後は、到達度テスト、FBして学習させていく内容についても、後日報告をさせていただきたい。

4. 第3回運営推進委員会について

次回は、 2013年2月18日（月）13時30分～17時00分

19日（火）10時00分～12時00分 愛媛大学にて行う。

*12月20日までに出席連絡票を会場校担当まで回答する。

以 上